



李悦叔 著

『近代の水晶玉——近代女性と韓国文学』(ソミヨン出版、2016年)

이태숙 지음 『근대의 수정구슬 — 근대 여성과 한국문학』(소명출판, 2016년)

本書は、檀国大学校教養教育大学教養学部教授・李悦叔の2冊目の単著である。著者は韓国〔朝鮮〕の近代文学形成期における女性作家の研究を出発点として、近代文学の本質をどのように規定することができるかという問題を追いつけて来た。前著『文化とセクシュアリティ』(イエリム企画、2004年)において浪漫的な愛は近代的認識の所産であると論じた著者は、本書では植民地期の女性文学について、近代性と女性を結びつけて論じた。

アルゼンチンの作家ボルヘス(Borges)は、言語の限界を超えた無限の現実の再現を「アレフ(Aleph)」という水晶玉を用いて説明したが、李によると韓国近代文学もまた、ボルヘスの水晶玉のように世界のあらゆるものを内包することができる。近代の成立において私的領域の拡大と定立はもっとも重要な問題であるが、韓国近代女性と彼女たちの生、文学、そして相互の連帯などは、当時だけでなく現在の韓国人を映し出す水晶玉となるだろう。

第1部「女性と近代性」では、近代性、女性性、女性主体の問題について、近代初期の女性作家・ナヘソク羅蕙錫、キムミョンスン金明淳、キムイリョブ金一葉を取り上げて論じた。羅蕙錫はスウォン水原の富豪の娘で、才能ある美術学徒であり、周囲に注目された新女性であり、華麗な結婚と離婚によって世間を騒がした女性であった。金明淳はキヘセン妓生出身の妾の娘で、生涯にわたる不浄なセクシュアリティの経歴をもつが、彼女は自らの飛びぬけた文学的才能をつかってそれらを浄化しようと努めた女性であった。金一葉は、新文明の洗礼を受けた貧しい苦学生であったが、彼女もまた世間の耳目から自由ではありえず、羅蕙錫や金明淳のように精神病にかかって世の中に背を向ける代わりに、剃髪をして出家の道を歩まねばならなかった。彼女たちは、近代的女性主体の問題を自身の生と文学の主題とした。

「七面鳥」(1921-22)、「タンシリとチュヨンイ(탄실리와 주영이)」(1924)などのような金明淳の作品には、近代初期の女性の告白体文学の特徴がよく現れている。妓生の娘であり自由恋愛主義者であった彼女の小説からは、当時の社会が女性に課した不浄なセクシュアリティの在り様と矛盾が、彼女自身の個人的な矛盾によってしっかりと読み取れる。

前期金一葉の自由恋愛論は、1920年代の女性主体の定立において、封建性からの脱皮と新たな女性の性欲の発見という時代的な意義をもっていた(「私は行きます」(1920)、「愛」(1926))。しかし、彼女の探求は結局現実の壁にぶち当たり、その代わりに「仏法」の道を選択することになる。1923年に僧侶となった彼女は、仏教哲学における超越の美学を論じた。

第2部「女学生と恋愛」では、20年代のもっとも熱い言説(discourse)であった「恋愛」について、

女学生・女性社会主義者、ベストセラーをキーワードに論じた。初期の近代女性が自由主義者としてのフェミニストであったとすれば、20年代後半は社会主義の思想的な拡大のもとで、女性運動も社会主義者としての女性問題がもっとも重要になった時期であった。このような点について、朴花城、姜敬愛カンギョンエなどの代表的な同伴者作家を中心に分析し、当時の社会主義言説と女性言説の関連性について特に詳しく検討した。

結婚と愛という個人的な問題が近代の自己決定性における中心問題に変化すると、近代文学は、主体としての女学生と彼女たちの自由恋愛言説に注目する。日本でも二葉亭四迷の小説「浮雲」（1887）などで明治期の女学生が直面した恋愛における主体性の問題が取り上げられているが、植民地朝鮮の女学生には、それに加え「近代の先駆者であり民族の指導者」としての切迫さも付与されていた。男性作家の小説のなかでは1920年代の朝鮮女学生は世相に流される受動的・他者的な存在であったが、女性作家は自分を含めた女性を近代的主体として定立しようとした（羅蕙錫の「瓊姫 [경희]」（1918）、金明淳の「振り返る時 [돌아다볼 때]」（1924））。

このような第1世代の女性作家たちは、「女性解放」が「性の解放」へと結びつくことで世間の嘲弄と個人的な破滅を経験するが、朴花城や姜敬愛に代表される第2世代の女性作家たちは、「女性解放」を「社会的問題への拡大」という立場をとることで、階級的な視点を得る。しかし朴花城の小説では、「下水道工事」（1932）、「二人の乗客と鞆 [두 승객과 가방]」（1933）、「斜面 [비탈]」（1933）、「かぼちゃ [호박]」（1937）などにみられるように、女性は男性社会主義者の補助的な存在にとどまっている。それに対して姜敬愛の「母と娘 [어머니와 딸]」（1931-32）、「塩 [소금]」（1934）、「麻薬」（1937）などのような作品では、具体的な生活のなかでの女性の役割がよりはっきりと現れている。

第3部「女子留学生と新たな伝統」では、当時の言説の最頂点にあった女子留学生を中心に新たな女性の伝統がつくられていく過程を論じた。特に当時の観点から、女子留学生が形成した共有の場が、言説の形成と拡散にどのように機能していたのかを考察した。

東京女子親睦会の機関誌『女子界』（1917-21）は、男子留学生の雑誌であった『学之光』（1914-30）に並ぶ女子留学生の言説の場であった。同誌は女性言説の内容が不十分であったという問題はあるが、4号以降女性の声が増えはじめた。

『権友』（1929）は左右合作団体であった新幹会の姉妹団体である権友会の機関誌で、1度しか発行されなかった。権友会によって社会主義中心の左右合作女性運動が本格的に組織化されたものであるが、同会が労働農民女性を中心とした組織に変わらなければならないという主張は、『権友』創刊号から提起された。会の創立から2年後に発刊された創刊号において、無産女性を中心とした志向性は修正されるべきだと主張されたのである。このような左右の不安定な同居は、結局は瓦解してしまう。

最後に、あらためてボルヘスの「アレフ」について言及しておきたい。作家としての言語を使うことには、それを使用する人々が共有する一つの過去が前提されなければならない。ならばわれわれにとって近代とは、ボルヘスのように今日の私たちを説明することのできる「アレフ」であろう。近代女性や近代女性文学を考察することは、近代を形成する宇宙の場面々々を、水晶玉を通して観るのと同じである。本書はそのような考察の結果である。



金明仁 著

『文学的近代の自意識』（ソミョン出版、2016年）

김명인 지음 『문학적 근대의 자의식』 (소명출판, 2016년)

本書の著者金明仁は、1980年代中盤～後半に韓国で起こった各種の文学論争にいわゆる「民族文学主体論争」の論客として加わり、「闘争としての文学」を率いた人物である。彼が仁荷大学校師範大学国語教育科の教授となってからは文学史研究にも力を入れ、修士・博士論文を単行本として出版して以降初めて、評論集ではなく文学論文集が出版されることとなった。

著者にとって、韓国近代文学とは「植民地近代文学」である。そしてこの植民地近代文学を貫通する「精神的なもの」の核心は、「植民地近代性」である。ここでいう「植民地近代性」は、一方では近代とは植民地近代の別の呼び名に過ぎないという考えから、それを一つの「安定的な過程」として認知する近年の「植民地近代性論」と似ているが、他方ではそのような「精神勝立法」では絶対に消去したり治癒することのできない実際の歴史過程で生まれた数多くの搾取と抑圧のメカニズム、差別と侮蔑、劣等感と羨望の心理構造、そして抵抗と解放の脱植民地主義的実践などのあらゆるものを包含した複雑な何かである。

第1部では、「民族文学（論）」と「民族文学史」の歴史と運命が扱われる。先の議論をつづけるならば、韓国人にとっては民族文学や民族文学史は、いずれも「植民地民族文学」であり「植民地民族文学史」であろう。

「民族文学論と東アジア論の批判的検討」（2005）は、2000年代以降の「ポスト民族文学論」の特徴と難題を扱った論文である。河景日の民族文学論と崔元植の東アジア論がその対象となっているのだが、この二人の理論家は、90年代半ば以降「民族」言説一般に対して激しく圧力を加えてきた「解体的近代批判」の思惟と言説の攻撃に直面した「民族文学（論）」は、それに対してどのように対応してきたのか、その対応はいかに適切かつ持続可能なものであったのかを問う。

「民族文学と民族文学史の認識の転換のために」（2001）および「文学史の叙述は不可能なのか」（2010）は、民族（国家）言説のもつ近代言説としての排他性と暴力性が全面的に批判されるなかで、10年間かけて行われた民族文学史に関する考察の痕跡である。前者が脱近代言説の激しい挑戦の前に立った民族文学と民族文学史の動揺に関する記録であるとする、後者はそれにもかかわらず脱近代言説の遠心性が結局は現実を克服できず新自由主義的イデオロギーのなかに包摂されていくなかで、政治的実践の場としての「民族」の領域とその言説的な実践行為である政治的叙述としての（民族）文学史を書く可能性と必要性を模索したものである。

第2部では、作家／作品論として、李人植、廉想涉、朴泰遠、李箱など植民地近代の真っ只中に生き、作品を書いた作家たちの意識と文学的実践のなかで、先に述べた「植民地近代（性）」がどのように変奏していくのかを多様な経路と観点から探求した結果がまとめられている。

『『鬼の声』とある親日開化派の世界認識』（1998）は、新小説のテキストを前近代的な封建体制と近代的な植民地体制の間での土着のブルジョアたちの動揺と選択の記録として読解し、特に李人植の『鬼の声』は「強大な旧世界によって蹂躪される開化世界の受難史としての新小説」という林和イムファの新小説規定をいかに成功的に具現したのか、そしてそれが李人植の親日的世界認識や行跡とどのようにつながるのかを考察したもので、近代（文学）史における「親日」は、単純な「背信行為」ではなく「植民地近代」という状況のなかで強制された必然的な選択肢の一つであったことを示そうとした。

「悲劇的自我の形成と消滅、それ以後」（2005）は、1923年前後に廉想渉のテキストに起こった「悲哀と幻滅の自我」における「残忍な観察者」としての中心話者の変化を、浪漫的な主体と合理的な主体という近代的主体の契機的両面性が錯綜して現れざるをえない植民地近代の特性と、抵抗的主体形成の難しさという植民地状況が強制した変化として読み解く。

「近代小説と都市性の問題」（2000）は、朴泰遠の「小説家丘甫氏の一曰」を「意識と世界の不一致」の結果とは考えず、最初から破片的な叙事構造を意識しつつ入り込むことで植民地都市の時空間のなかでの没時間的な内面的省察を行った「徘徊型小説」と規定し、それが「旅行型小説」が不可能となった近代都市的な生を形象化するモダニズム小説の新たな戦略の一形態でありうるという点を明らかにした。

「近代都市の外部を思惟するということ」（2009）は、1930年代の李箱と1960年代の金承鉦キムスンオクのテキストから、資本主義または植民地下の近代都市における生を批判的に眺め、それを近代都市の外部に対する浪漫的な思惟に結びつけた痕跡を探り、それらのテキストを韓国文学の伝統においてきわめて不足したポスト近代に対する積極的な省察と代案的な生の空間に対する文学的な模索の一つの可能性として把握した。

第3部では、韓国近代文学の起源と経過に対する著者なりの散発的な探求の結果がまとめられている。

「韓国の近代文学概念の形成過程」（2005）は、1910年代から20年代初めまでの植民地朝鮮における近代的な文学概念の形成過程を追い、その核となる資質が「情→生命→人生→現実→階級」へと変貌し、それはすなわち「浪漫主義→自然主義→民衆芸術論→プロレタリア文学論」への発展過程に対応する流れであるということ、しかしその流れの底辺にあるもっとも際立ったものが「悲哀の感覚」として植民地近代文学の基本感覚をなしているということを論じた。

「主体的文学観の構成の模索と挫折」（2004）は、解放期に刊行された白鉄ベクテョルの『文学概論』と金起林キムギリムの『文学概論』を検討し、それらを、日本を経由して伝わった西欧的文学観に囚われていた近代の文人たちが解放を迎えてはじめて、自分たちにとって文学とは何か、または何であったのかを主体的な観点から問いはじめた萌芽的業績として位置づけ、それを「近代文学」あるいは「植民地近代文学」に対する今日の問いと結びつける必要があると論じた。

「韓国の近現代小説と家族ロマンス」（2006）は、フロイト（Freud）の家族ロマンスという概念にもとづいて韓国近代小説の流れを概観し、西欧の近代小説における家族ロマンスの比較的自然な実現とは異なり、植民地近代という異なる経路を辿った韓国の近代小説においては、自力ではなく外来の力による「父の否定」によって安定的なブルジョア主体の叙事詩が誕生せざるをえなかった点について論じた。

「親日文学再論」（2008）は、2000年代に入りそれまでの「暗黒期」という封印を解いて活発に行われた「親日文学」の議論を概観し、その論争的な展開は親日文学に対する民族主義的な強迫と植民地ファ

シズム論という過剰決定を批判的に克服しつつ行われたが、今後この40年代前半の文学が植民地近代文学というより普遍的文脈のなかで解明されなければならない、またそれを十分に評価することのできる美学的な基準が提示されなければならないと主張した。

著者は、植民地における近代は「暴力であり誘惑」でもあるという明確に両価的アンビバレントな形で顕現してきたと考える。そして現在そのような両価性はなお駆動しており、明確にその両価性の外部で行われる純粋にメタ的な作業は不可能であるとする。したがって、著者にとって韓国近代文学を研究する作業は、植民地時代とそれ以後を共に歴史化する作業であると同時に、研究する主体に対する精神分析的な作業でもある。

[日本語訳 呉仁済]